

# 槐 かい

岡井省二創刊

平成29年5月号

平成二十九年五月一日発行 第二十七巻第五号 通巻第三二二号 二毎月一回 一日発行  
平成二十九年五月十六日 第三種郵便物認可



# 醍醐の花見

高橋将夫

よき種に古里のよき土と水  
噴火してしまった山の苦笑ひ  
あの頃が花だつた妻燕の巢  
母になる前から強し鳥の恋  
西行の花と醍醐の花見かな

ジャンボ機を追ひ抜いて飛ぶつばくらめ  
音速の壁にぶつかる春の雷  
囀りはデジタル愛はアナログで  
藁や人工知能に心生る  
考へに考へ抜くも大石忌  
核実験するのは男ひな祭  
人生も野火も前へと進むのみ



# 花の山

高橋将夫

白衣から普段着になり山笑ふ  
花魁の歩みのごとく日脚伸ぶ  
雪解川金剛心を押し流す  
人間が居るゆゑ山河あたたかし  
人生の徐行しどころ花の山  
人生のほころびを縫ひ針供養  
やはらかなところは苦し田螺鳴く  
夢なりと思ひつつ見る春の夢  
一線を越えずに終はる春の夢  
人間が吸うて躑躅の花の芯  
待つことにすつかり慣れて大石忌

首とんで事おさまりぬ白椿  
突破口春一番が開きけり  
一番と違ふ吹き方春二番  
走る野火時をり躊躇してをりぬ  
春が来て小川の水がよく跳ねる  
風車風に遅れて回りけり  
春祭先へ先へと子らの行く  
落ち角の非の打ちどころなき形  
雲雀あがりて借景の完成す  
無意識の中にもぐつてをる田螺  
穴あれば誰もが覗く春野かな

海女の桶浮んでゐたる淋しさよ  
陽炎の中の男と女かな  
人を恋ひ命をしめとさくらかな  
琴線にも春の埃の積もるなり  
春草を褥に石の枕かな  
回春の妙薬を溶く芹の水  
次々と夢を消し去る上り築  
天地のギャップを埋める霞かな  
そこだけは霞かからず裁判所  
杜若雨に濡れんがために咲く  
ふらここの心残りの揺れなりし  
蒼天の高さを知つてをる雲雀  
恋の猫がりがり我利と爪を研ぐ  
目貼はぎ風より声のよく通る

春月や目で音を聞くベーターヴェン  
溶鉦炉からほとぼしる昭和かな  
ステルスの低空飛行つばくらめ  
薄氷のかすかな動き重力波  
静けさや胎盤の中繭の中  
蜃気楼に立てかけてある梯子かな  
春の闇振り返ることおそろしき  
失敗は種蒔く時に遡る  
うららかや自在に生きてゐる体  
白山や末期の水は芹の水  
春雨に濡れてゆきけり死者生者  
死も闇もしばし忘れて花の山  
天の時のがすことなく竜天に  
人類の繁栄春の星無尽

# 槐安集

水野恒彦

人よりも神に近づく枯蠟螂  
この巨石黙りこくって石路の花  
昼の星たしかに見しと海鼠噛む  
冬薔薇むしろ残像ではないか  
鳥葬の夜空に刺さる冬昂

加藤みき

もてもての春の翡翠待つてをり  
蘆の角づぶづぶ靴に水来る  
藪椿波路はるかに渡海せむ  
骨柄は変らじあをき櫻かな  
花筏鳥のなきがら囲みたる

中島陽華

大わらは青瓢箪に頬寄せて  
モザイクは天使ミカエル春隣  
うかれ猫ぶち割茶碗蹴つ飛ばし  
牛飼の少年の空春兆す  
松過ぎの重箱おうむ小町かな

竹内悦子

大寒の薬缶空焚きしてゐたる  
突然の訃報なりけり六花  
白足袋や女房の役終りたる  
薄氷や馬穴の中の世界地図  
立春大吉馬券大きくはづれたる



雨村敏子

見えてゐてはるかなるもの寒の雁  
二ヶ月の絞り切つたる矢を放つ  
槐の字の鬼に親しき涅槃空  
海へ出て雪解の水の藍となる  
教室の椿の水を替へてをり

本多俊子

春がすみ天意の砂丘生(なま)めかし  
天空の穴より覗く春の月  
聞香や虚空をつきて松の芯  
海神の声磯巾着の昼ふかし  
春雨を髪に含みてしまひけり

近藤喜子

恋猫のこゑ小面に魔性ふと  
銀河系 宇宙に 我も 浮氷  
鏡にはなれぬ氷の解けにけり  
水草生ふ青き地球の懐に  
身のどこか靄いつまでも春の風邪

瀬川公馨

凧の駄賃に烏魚子もつてけ  
冬がすみ慌てて懐中さぐりたる  
梅一輪孤高を保ちぬたりけり  
白銀の舞台装置の極まれり  
風花やグレイージュといふ言葉あり

グレイージュ#グレイとベージュの間

久保東海司

折紙の鶴にひと吹き白い息  
鮎を干せるすだれのそれへ雪  
湯宿打つ霰こまどり湯の町に  
強東風の果ての沖鳴り聴くばかり  
沖鳴りのたかぶり海猫(ごめ)の鳴き止まず

柳川 晋

冬送るための呪まじなひ野に山に  
鬼の豆構へ正義の人となる  
壁を越へ魚氷に上り果(おほ)せけり  
蛇穴を出でて国民投票へ  
春の夢醒めたる朝あしたからが春

熊川暁子

水を火にのせて座はりぬ冬の底  
寒雷に動くことなし大琵琶湖  
甘老海の青き卵や冬銀河  
送りしは大寒といふ重きもの  
冬籠りよりにこにこと出でゆけり

寺田すず江

蒼穹や星になりたき節分草  
花菜風遠嶺の白くかがやけり  
算盤のぽつんと置かれ冴返る  
山の昼春のひかりを浴びにけり  
亀の鳴く生きる途中の夕べかな

岩下芳子

ぴかぴかに光れよ春の泥だんご  
春の野に出でませ遊行観世音  
大天狗のうちわで煽ぐ春一番  
現はれて海の気を吸ふ蟹気楼  
間口広し千種ちぐさの揃ふ種物屋

近藤紀子

春浅しポニーに乗る子弾みみて  
ランドセルに春泥はねし下校の子  
釘煮屋の海狂ひしと不漁嘆く  
薄ら氷をわざと踏みしを見られたり  
雪見障子しんとありけり和三盆

岩月優美子

雪解けて地霊山霊現はるる  
凍返る夜にしかとあり耳ふたつ  
炎なるゴツホのタツチ春愁ふ  
出遅れし亀には遠く春満月  
潮騒を枕としたる朧かな

竹中一花

病いんまを佛ふ力や櫻まじ  
街路樹に眠りし鳥やつくし伸ぶ  
包装紙につつむすみれを子と摘みし  
まつ白き椿をくぐる海の道  
谷深くものの芽探す藁の籠

前田美恵子

薄氷の融けて迷路の広がりぬ  
ものの芽や隠れ家めきて住みにける  
春炬燵和紙に並べる六文銭  
花嫁の衣裳選びや水温む  
春野行くローカル線の大廻り

中田禎子

寒鯉の百匹潜む神の池  
蠟梅や日差しの中の飴細工  
新しき事のはじまりセロリ噛む  
薄氷やガラスの靴の片一方  
鬼遊びの一人づつ抜け春夕焼



# 槐市集

有松洋子

一歩一歩未知が嬉しい仔馬かな  
玲瓏や広野を駆ける春の駒  
身の内に隠る言葉よ芽立ちせよ  
春の泥小さき足と跳ね踊る  
夕暮は骨の色とも白木蓮

犬塚芳子

境内の梅はひかりに包まるる  
春風の人となりみて橋渡る  
猫柳猫ふつくらと光るなり  
すつぽりと帽子をかぶかすみれ草  
菜の花にあつと云ふ間の夕日かな

犬塚李里子

鷹一羽遠嶺めざして羽搏けり  
雪柳わつとしだれて湖揺れる  
枯蓮寺領早くも昏るる水  
誰彼と話したくなる梅月夜  
日のさして揺らぐ薄水鯉の口

井上静子

今ごろは詩吟三昧梅日和  
臘梅の香り移りし包み紙  
囿炉裏端をまあるく囿む木椅子かな  
早春の烏の親子鳴き交はす  
春菊のかをりを頂く夕餉かな



今井充子

代筆の書齋の机凍返る  
山焼や若草山の天染めて  
木木被ふさくら色なり春霞  
何もせぬと言うてゴソゴソ寒明くる  
病院の待合室や春浅し

岩田洋子

別院の籠りの僧や雪椿  
雪しまき街道筋の道祖神  
北風に堪へし千年磨崖仏  
大屋根の雪のどつと落ちてくる  
笹鳴きの風に乗り来る佳き日かな

江島照美

みどり子にされるままなる子猫かな  
受験生赤いズックで駆け上がる  
針もたぬ娘もをりし針供養  
告白の手紙のあつさ春催ひ  
満員の車内の殺気受験生

岡田桃子

窓の雪ばかり見てみて豆煮える  
美しき炭火と猫に迎へらる  
向ひ山遠し点描の雪雪  
不要不急の外出避けよ春嵐  
ポケットに鍵束堰の雪解水

荻布貢

朝刊の配達の音冴返る  
女房の鬼の霍乱二月尽  
静かなる流鏑馬の道椿咲く  
床に印す大工の手すさび親鸞忌  
西本願寺御影堂  
手弱女の襷をつなぐ京の雪

久保夢女

鼻水をすすり火を守る男の子  
どこまでも猫柔らかく春兆す  
地球なる故郷騒がしくロツカス  
節分鰯われをわれをと言ひ立てり  
胸叩き合点承知寒明ける

# 槐集

## 高橋将夫選

三寒四温いま悩み事二つ 大阪 有松 洋子

公案に合格春の鳶の円

春嶺の裾に風棲む村のあり

土に沁む春のしづくの円みかな

縄飛ぶ子まるで夕日を抱くやうに

鬼を飼ひ福を笑うて鬼やらひ

泥水の薄氷のふち透き通る

春の雪恋の傷まで開くよな

選ばるる選ぶ楽しさバレンタイン

人を知り己を知りて余寒かな

前向きに生きよと聞こゆ木の芽風

地虫出で無明の闇を残したり

洲浜草咲いてころにともるもの

春灯に能面の喜怒感じたる

陽にゆるぶひとかたまりの蝌蚪の紐

岡崎 吉田 順子

江島 照美

奥嵯峨の時雨となりぬ弥陀と釈迦 大阪 平野 多聞

白菜を剥くがごときの法話かな

雪国の菩薩となりぬ冬木立

枯蓮や茎に瞬く無辺光

犬ふぐり越すに越されぬ墓地の柵

レコードの針置くように落椿 枚方 高野 昌代

五線紙をはみ出している早春賦

大いなる槐の心や青き踏む

彼の和菓子春一番の忘れもの

未来図を描くも塗るも帰り花

一木の冬木に向かひ祈りける 橋本 順子

日当たれる流れに青菜放ちけり

丸ポストに雪解の光投函す

鯨来る一湾の声弾みける

春水星のまたたき幾重にも

# 銀河往来

# 高橋将夫

## ◆槐集観照

縄飛ぶ子まるで夕日を抱くやうに 有松 洋子  
「夕日を抱くやうに」の比喩はこの作者ならではのもの。縄飛ぶをする子の姿を思わず想像してしまう。

〈春嶺の裾に風棲む村のあり〉の句の「風棲む村」とへ土に沁む春のしづくの円みかな〉の句の「春のしづくの円み」はこの作者ならではの感性。

〈公案に合格春の鳶の円〉の句はそれぞれこそ禅問答。公案は参禅者に言葉で与えられる課題だが、大空に描く鳶の輪はまさに禅の悟りの象徴としての円相。めでたく課題に合格。

泥水の薄水のふち透き通る 江島 照美  
水たまりに浮く薄水の様子が客観的に描かれている。客観写生にも佳句はあるのだ。泥に咲く蓮より美しい。

〈春の雪恋の傷まで開くよな〉は作者の署名入りの句といえよう。〈選ばるる選ぶ楽しさバレンタイン〉の句、バレンタインのうれしさは、チョコレートをもちょうことではなく、送る相手を選んだり、選ばれることにあるとのこと。その通りだと思ふ。

陽にゆるぶひとかたまりの蝌蚪の紐 吉田 順子  
春の日差しの中に散らばってゆくおたまじゃくしの様子が目に見えるようだ。

〈州浜草咲いてころもともるもの〉の「心に灯る」や、〈春灯に能面の喜怒哀感したる〉の「能面の喜怒哀楽の表情」は作者ならではの感性。

〈前向きに生きよと聞こゆ木の芽風〉からは、前向きな気持ちかストレートに伝わってきて共感を呼ぶ。

雪国の菩薩となりぬ冬木立 平野 多聞  
雪国の冬木立が菩薩に見えるという。例えば、樹水を想像したら、そう思えそうである。

〈奥嵯峨の時雨となりぬ弥陀と釈迦〉も〈白菜を剥くがごときの話かな〉も〈枯蓮や茎に瞬く無辺光〉も仏の世界。精神の風景。

一転して〈大ふぐり越すに越されぬ基地の柵〉は「越すに越されぬ大井川」の現代版のパロディ。

レコードの針置くやうに落椿 高野 昌代  
「落椿」に対して「レコードの針置くやうに」の比喩がユニーク。これこそ落椿の本質。

〈五線紙をはみ出してゐる早春賦〉は青春を思わせる。〈大いなる槐の心や青き踏む〉は槐への存問の一句。「大いなる」がいい。「青き踏む」が爽やか。〈以下略〉